

「仏教の箱—荘厳された東アジアの容れもの—展によせて」 仏教における箱の荘厳について

仏教における最初の重要な容器は、舍利容器といえます。舍利を納める容器としてはインドのストゥーパや仏塔がありますが、ここでは、箱ものとしての舍利容器を見ていきます。沙羅双樹の下で釈迦が涅槃に入った後、その遺骨は仏舍利とされ、これを奉安する仏塔もまた礼拝される対象となります。舍利を奉籠する舍利容器は更にこれを納める外容器を伴う場合が多く、舍利は埴びやかに荘厳された容器の中に籠められて厳重に守護されました。これらは瓶や合子、筒形、塔形や棺形などの形状で、材質はガラス、水晶、金、銀、青銅、鉄、陶磁器、石など様々です。異なる材質の容器を入子状に重ねる理由は、釈迦が涅槃後の供養方法として、釈迦の身体を清浄な綿の布で包み、金、銀、銅、鉄の棺に入れると説く『大般涅槃經』(大正蔵)7)や『摩訶摩耶經』(大正蔵)383)の内容に拠ると考えられています。(「佛言阿難、供養軀輪聖王之法、用新淨綿及以細氈、合纏其身。如之乃至積滿千重、内金棺中。又作銀棺、盛於金棺。又作銅棺、盛於銀棺。又作鉄棺、盛於銅棺。」『大般涅槃經』卷中199c)

中国唐時代には、皇帝によって阿育王を做った仏舎利の奉安が盛んに行われ、また、金工技術の高まりを背景として、華麗な装飾が施された舍利容器が数多く残されています。「舍利容器」(図1・2、重要美術品、唐時代、泉屋博古館)は石製の外函内に大小の金銅棺形容器が納められる構造で、山東省済陽県出土と伝えられています。長方形の箱に傾斜する屋根が取り付けられる棺形の舍利容器は唐時代に特有のもので、最も内側に納められる

小型の金銅舍利棺に文様は施されませんが、大型の金銅棺形舍利棺には天王像や奏樂する飛天などの浮彫像や装飾的な欄干などが取り付けられ、石製外函の側面には十大弟子や舎利の分配を行った八国の国王などが線刻されています。

日本では飛鳥・白鳳時代の法隆寺五重塔(和銅四年711年)や崇福寺塔の心礎から鏡や玉、鈴などの荘厳具とともに発見された舍利容器が早い時期のもので、主にガラス製の舍利瓶が金属製の舍利容器に納められました。統一新羅時代には宮殿形舍利容器、平安時代以降には宝塔形舍利容器などがあり、金銅製の容器の中にガラス製の舍利瓶などに舍利を奉籠し、安置されました。日本特有の舍利容器の形状には五輪塔があり、密教で説く宇宙観の五大を象徴して、下から方形(地)、球形(水)、三角形(火)、半月形(風)、宝珠形(空)が積み上げられた形状をとります。平安時代中期(十一世紀前半)には既に作られ、鎌倉時代には水晶製五輪塔が多く作られています。

仏像が祀られる場としては龕や厨子、仏殿があり、仏像を納置する容れものとしての空間といえます。龕は石窟に設けられた仏像を安置する窪みであり、磨崖仏の窪みや石または木製塔の四面に窪みを設けて尊像が彫り出された彫刻も含まれます。「石造四面仏」(図3、唐時代、高38.5cm、大和文華館)は、塔の四面に弥勒如来、無量寿如来、定光如来、釈迦・多宝如来が深く彫り込まれ、手前には香炉が置かれて供養者が礼拝し、仏龕が精緻に表現されています。

厨子は仏像だけでなく仏画や舍利、

經典など仏の教えを体現するものが安置されます。仏殿が象られた厨子は建造物と同様に扉を開いて内部を礼拝する形式をとり、内部には空間を作った小型の金銅仏などが安置されました。「黒漆宝篋印塔嵌装舍利厨子」(表紙・裏表紙の図版参照、重要文化財、鎌倉・嘉禄二年(1226)、奈良国立博物館)は厨子の壁に宝篋印塔が象られて舍利を奉安する装置を備え、また背板には釈迦金輪像及び中台八葉院の種子曼荼羅が描かれます。厨子の内部には法華経冊子が納められ、舍利厨子と経厨子の両方を兼ね備えています。

平安時代の初めに、妙法蓮華經を根本經典とする天台宗が最澄によって唐から日本へもたらされます。法華經では、悟りを得ようとするものにとって造塔・造仏・写經とそれらの供養が作善として重要とされ、平安時代の貴族は金銀など高価な材料を用いて法舍利と称される經典やこれを納める経箱や経筒を飾り、仏の教えを華麗に荘厳することで、篤い信仰心を示そうとしました。「一字蓮台法華經 普賢菩薩勸發品」(展覧案内左図、国宝、紙本着色・墨書、26.0×322.2cm、平安時代後期)は平安時代の装飾経を代表する作品の一つで、料紙は金銀の切箔や砂子が全面に散らされて美しく飾られ、経文は一字ずつ蓮台に載り、金の輪に囲まれています。見返し絵には法会の様子が優美な雰囲気の中に描かれ、経巻を手に読經する僧侶の前に置かれた金銅製の金具を付けた漆製の経机などを見ることができます。

また、末法思想により、永承七年(1052)から始まる末法の世に備えて仏の教えを後の世まで伝えるために、經典を経筒や経箱などの容器に納めて仏像や仏具とともに地中に埋納する経塚が流行しました。平安時代に栄華を極めた藤原道長(966-1027年)は、奈良県の高塚山に経塚を造営しており、高塚山から出土している経筒(寛弘四年・1007年銘)には、無上の菩提を祈願するなどの銘文が刻まれています。また当時、多くの貴族が埋経を行い、道長や彼の曾孫である師通が奉納した経箱及び『法華經』や『無量義經』(展覧会にて展示、重要文化財、平安時代、奈良・金峯神社)が出土し、師通は天皇や藤原一族の福寿延命を祈願し、弥勒出生時に龍華三會に結縁することを願っています。女人成仏を説く法華經は貴族女性によっても篤く信仰されました。「金銀鍍宝相華唐草文経箱」(全体図は展覧案内右図、国宝、平安時代、滋賀・比叡山延暦寺)は現存する最も華麗な経箱の一つで、長元四年(1031)頃に道長の娘である彰子が書写した法華經を納めて、比叡山に埋納したものと考えられています。箱は丸みのある角で柔らかな形状をして、格狭間の台座の上に箱が載る様子が線刻であらわされます。蓋上には『妙法蓮華經』の文字が刻まれ、蓋から側面にかけて金銀の鍍金を施した華麗な宝相華文で埋め尽くされています。蓋をあけるとその内側には愛らしい小さな花文が線刻されており(図4)、女性らしい好みや心遣いが感じられます。

美しく装飾された箱はそれ自体が価値を持ち、大切に伝えられていきます。展覧会では、飾られ、荘厳された箱から、そこに籠められた人々の様々な願いにも思いを馳せていただけたらと思います。(瀧朝子)

図 1



図 2



図 3



図 4

